

鼎談

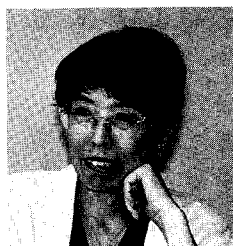
神の前に在る「人間」とは誰か

女性の日常経験に裏付けされた視点による
『キリスト教神学事典』

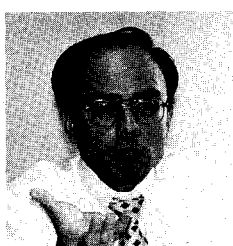
岡野 治子



奥田 暁子



森本 あんり



編集部 最初に出版の経緯について、日本語版監修者のお一人である岡野先生におうかがいしたいと思います。

岡野 原著は、ドイツで一九九一年に出版され、フェミニスト神学の事典としては、世界で初めてのものです。

なぜドイツが一番最初にこういうフェミニスト神学事典が編まれたかということについては、中世を通じて神学の歴史が、良くも悪くもどっかりと日常生活の中に腰を据えているというヨーロッパの現実があります。中世以来、女性神学者もたくさんいたのですが、実際に教会神学を牛耳ってきたのは、やはり男性だったのです。その男性の視点で、男性の言葉で語られてきた神学の中で、女性が非常に抑圧されていた経験が、中世を通じて長く堆積していたわけです。

その重い抑圧をはね除けるという意味と、やはり神学の担い手が多くの場合ドイツ人だったという現実があると思います。

女性の視点

奥田 従来の神学事典や聖書事典などとはずいぶん感じが違いますね。

まずジェンダーの視点が大胆に出ているということと社会学や心理学、歴史学といった専門家たちの言説がずいぶんたくさん使われています。そういう点でいわゆる「神学」というよりかなり幅広いという感じはしました。

現代の問題を浮きぼりにするということは、性差別を批判し、拒否することですから、それは今までの男性中心の神学をラディカルに問い直すことになります。結局は、これまでの聖書解釈や教義神学、教会史などの中心的言説を変革するという大きな意味があると思います。

ただ、執筆者の神学的視点はずいぶん多様だという気がします。

現在は少し変わってきているかもしれませんが、アメリカの場合、初期の頃はやはり女性ということ強く出して、共生とか共存というのはあまり出していなかった

と思うんです。男女の共生と共存が強調するあたりがドイツ的なかなと思ったんですけれど。

たとえば、「結婚」という項目もわりと穏やかな書き方をしています。その辺もドイツ的なのかなという感じですよ。

それから、欧米中心ではなくて、十分とはいえませんが、第三世界が視野の中に入っているというのは、とてもいいと思いました。

森本 日本でフェミニズムの神学事典が出たのは最初ですから、非常に大きなインパクトがあると思います。

しかし、本心を申し上げますと、これはやはり日本人に書いていただきたいかった。これだけ働き手もいるし書き手もいる、翻訳者もいらっしやるわけだから、十分そういう力はあつたと思います。

というのは、本書には女性の日常経験が反映されていると書いてあります。だとしたら、やはり身近な日常経験というのは、日本人にとっては日本の女性の経験なわけですよ。

ゴスマンさんが「私たちは日本の読者の方々にヨーロッパのフェミニズムを押し売りしようなどと毛頭考えておりません」とおっしゃっていますが、ゴスマンさんはやはりそのことを気になさったんですよ。

ゴスマンさんが、ドイツでも日本でも現代の産業社会における女性の問題は、大局において同質だとおっしゃっているのは、その通りですが、違うところが一点ある、それは何かというと、やはりキリスト教。ドイツのキリスト教と日本のキリスト教の状態ははなはだしく違う。産業社会の問題は似ていますけど、「キリスト教神学」事典というところでは、違い(デイスパリティ)が大きいと思います。

ですから、次のステップは、やはり日本人の方々の手による事典を作っていた方がいいと思います。

奥田 私はそれを最後に提案しようと思っていたんです(笑)。

まだちょっとそこまでいかないんですよ、日本には、フェミニスト神学という言葉を知らないキリスト者がたくさんいる

ですよ。ある牧師さんに、フェミニスト神学って言ったら「えー、聞いたことがない」と言われました。だから、まだ日本でこういう事典を作る段階には至っていないんです。今後の課題ですね。

ドイツと日本の違い

森本 先生方の多くは女子大学で教えていらっしゃるわけですが、日本の大体のお母さん、お父さん方の期待というのは、やはり良家の成人女性としてきちんと教育を受けてもらいたいということがある。先生方としては、そのイメージの中に肯定的な部分もあればそうでない部分もあるのもご存じなわけです。そういうご自分の置かれてある実存状況とこの神学事典とのつながりをお聞きできればと思います。たとえば奥田先生が「結婚」のところを穏和に書いてあるとおっしゃっていましたが、僕は全然逆の印象ですね。かなりラディカルですよ。

岡野 キリスト教の中では、基本的に結婚というのが非常に重要な地位を占めてきているのだからと私は読んだのです。北欧とかアメリカなど結婚の実態や考え方がもっと多様になっている状況がすでにあるわけですが、それについてはあまり書いていないから、そういう意味で少し穏やかだと思っただけです。

森本 でもこれはカトリック的な結婚観への反発ですから、たとえば立場の違う人二つ書いてもらうとかしたほうがよかったです。ではないでしょうか。

岡野 かなりラディカルに書いているとは思いましたけれど、神学そのものを否定するという形ではありません。

抑圧の体験から

岡野 中世の重い神学の歴史を背負った中で、女性がついに発言を始めたというのが二〇世紀です。たとえば、「イエス・キリスト」と言ったときに、フェミニストの人は、「イエス」と「キリスト」を分けて考えて、「イエス」とはもちろん人性と神性を併せ持つ神の子であり、男性であっ

した。ひたすら処女性、童貞性というものが病的なまでに高い評価を得ている、というのはフェミニスト神学の言い分ですが、それは今、横に置きまして、普通の生活をする人々にとって、結婚というのは大前提になっていきます。結婚をしない人間はアブノーマルであるという価値観が、第二次大戦まで大勢を占めてきたことに対して、フェミニスト神学は、たとえ修道女にならなくても、母にならなくても、結婚をしなくても、女性にふさわしい生き方もあるのではないかと、自分たちの日常経験の中からの声をここに表現したんですね。

ただ、ヨーロッパも離婚の問題が非常に進んでいます。アメリカほどにシングルで生きるということが思想化してないという現実があるので、奥田さんの印象のように、それほどラディカルではない、と思います。やはり神学を大事にしていらした方から見ると、ものすごく大きなアンチテーゼを置いているように見える問題ではあると思いますが。

森本 いや、アンチテーゼでいいんですが、たということを否定するものではないのですが、復活した後の「キリスト」と言ったときに、性を考える必要があるのか、というのがフェミニスト神学の問いかけなんです。

「キリスト」はむしろ男女両性を含んだ、解放された人間のモデルという意味で、「キリスト」の中に男女両性を見るべきという方向があるわけです。そういう自分の抑圧の体験から出てきたキリスト像を捉え直すという発想は、やはりドイツを中心にしたヨーロッパの女性の中に、長い間醸成されてきたことなんです。

特にドイツ語圏の学校・大学でのキリスト教育に関しては、「政教協定」というものがあります。先生を選ぶのは個々の教区の承認を得なければなりません。特にカトリックの女性の場合は、どんなに勉強してどんなにすばらしい論文を書いても、聖職、教授職につけないという問題があって、それに対する恨み、抑圧というのも大変なものですよ。

名前ほとんど忘れ去られたような過去

ここでは「異性愛は絶えまない暴力である」とか「近代工業社会全体を解体してしまわないと結婚は意味がない」という発言ですよ。

奥田 そういう言い方もしているけれど、それを補足するような言い方もしていませんか。「結婚」の全体を読むと、それほどラディカルでもないなと思っただけです。

岡野 結婚という制度を育んできた社会構造そのものが、男性本位であり過ぎた、という異議申し立てですね。男も女も神の前に等しいという大前提があるにもかかわらず、現実の女性の経験から言うと、やはり夫婦生活というのは、「わからないことは家へ帰って夫に聞きなさい」という、男尊女卑の日常生活でした。

ですから、やはり結婚といっても、実際には支配、被支配の関係が夫と妻の間にあるということが、神学の中に一切入らなかったんですね。

奥田 ドイツの場合は、日本の状況とすごく似ていたのだからと思います。だからそういう言い方を、いったんそういう女性の神学者の歴史を掘り起こすことによつて、ヨーロッパの女性の神学者たちも、宗教あるいは神学を教えるという権利に挑戦したいという、そういう必然性も背景にあると思います。

奥田 この事典が出版されてから七、八年経つわけですが、ドイツの男性神学者はどういう反応でしたか。女性たちにも影響を与えたと思いますけれど。

岡野 まず女性への影響を申し上げますと、女性で神学を勉強する人は、日本で想像する以上に多いんです。つまり学校の宗教の先生になるという可能性がある点で、多くの女性が神学について勉強しています。その神学を勉強する生徒たちにインタビューしたり、あるいは私の実際の手応えで感じる限り、フェミニスト神学はもう常識になっていました。

ですから、聖職者である男性神学者たちが聖書の女性の悪口が書かれている箇所などを平気で読んでいくときに、「それを先生はどう思いますか」と聞く女子学生が出てきました。つまり、男性の神学者たちは

いつも試されるわけです。現代の視点を持つて聖書を理解しているのか、あるいは教義神学を構築し直そうとしているのか、学生のほうから問い直しています。

私がたまたま去年見てきたボン大学の例ですと、フェミニスト神学という講座を設けなければ時流に乗れないということ、講座のみは四、五年前に作られたんですが、注目される論文を書いて国際的にも活躍している女性が数々いるにもかかわらず、「過激過ぎる」、「ちょっと論文が少ない」、「歳をとりすぎている」などの理由で全部却下されて、結局空席のままです。

奥田 体制のほうがなかなか動かないということですね。

女性の視点による キリスト神学事典

岡野 そうなんです。いかにフェミニスト神学を運用することが難しいかというところが透けて見えるわけです。

奥田 でも、その次の世代にそんなに女子学生が増えていけるのなら、動かざるを得なくなるわけですね。

岡野 実際にそういう流れは強いんですが、こういうことから男性の神学者がこのフェミニスト神学事典について、どんな姿勢をおとりになるかが、たぶん想像がおつきになると思います。もちろん「こんな本は読むに値しない」と考えている方もたくさんいます。

ただ、今の体制的な神学に批判的な神学者も多く、どこの神学部にも一つはフェミニスト神学の科目がなくてははいけないと言う人もいることはあります。でも、全体にキリスト教会の体制を擁護している人たちにとつては、これは消えてほしいものでしょう。

ある女性神学者が大学にポストを得る際に誓約書を書かなければなりませんでした。マリアの永遠の処女性うんぬんという

教義は、とても女性が賛成できないのですが、それに「賛成する」というところにサインをしなければならぬとか、フェミニスト神学とは縁を切るというような誓約をしなければいけないとか、大変なスケジュールがありました。彼女はそれを拒否した結果、そのポストを失うという事件が起こったのが一昨年です。

奥田 こういう事典を作るというのも、かなり勇気がいったということですね。

フェミニスト神学の流れ

森本 でも参考文献を見てみるとずいぶん出版本数は多いみたいですね。

岡野 ありがたいことに、進歩的な神学者が中心になっている出版社がフェミニスト神学の本を喜んで出してくれるんですね。解放の神学とフェミニスト神学は、ヨーロッパでは少なくとも根っこは同じであると考えられていて、出版物は増えているのです。ただそういう出版社が教会の圧力もあり、一時つぶれそうになったこともあります。それは、フェミニスト神学のせいでは

ないかと(笑)。やはりフェミニスト関係の本を出しているのでは、もうかりません。

森本 誰が買うのですか。

岡野 フェミニストや一般の人が買います。この事典の原語表現もとても難しいものが多いのですが、意外に神学者ではない人も読んでいます。

奥田 シスターでも読んでいる人がたくさんいるということですか。

森本 僕がうかがっていたことの一つは、シスターの反応です。

岡野 ヨーロッパではシスターの後継者不足がすごく深刻です。そういう中で、七〇歳、八〇歳のシスターが何とおっしゃるかというのが気になっていたので、自分たちは耐えてきてしまったけれども、これを言ってくれようらしい」と。やはりご自分の体験の中に女性として聖書を読む中で疎外感を感じてきたシスターが、ほとんど全員であると言ってもいいと思います。ただ自分が中心になって表だって発言はしないけれども、若いシスターにはぜひ読んでらっしゃって、当事者になってほしいという

声を個人的に聞いています。

森本 でも当事者になるといことは、シスターという制度自体に根本的な問いをもつことになりまますよね。

岡野 ええ。制度的には、男性司祭のような地位を与えられていないという問題もあります。

森本 司祭職についての最近の事情は、ここに出ていますか。

岡野 最新の情報も入っています。また日本の女性教職についても編集部が特記しました。

奥田 日本では、聖公会が女性司祭を認めたのがつい最近ですね。聖公会のことも入っていますか。

岡野 聖公会のことは入れています。またカトリック女性司祭誕生に向けた下からの運動が強くなっているという事実もあります。ところがバチカンが、「イエス・キリストは男だった。使徒には男性だけを召命した」に固執していることに問題があります。

森本 しかし教導職とは別に、神学者たち

はプライベートに自由に発言できるわけですね。その違いを出してくれるとよかったですと思います。

奥田 かなり大胆な記述もありますね。たとえば「イエス・キリスト」のところでは、イエス・キリストを相対化すると言っているでしょう。男性の姿を取って人間になったという解釈を否定するわけでしょう。究極のメシアではないなどと大胆なことを言っています。

でもフェミニズムの立場から言えば、ここまで言ってくれないと困るわけですね。イエス・キリストを一回限りの受肉と言ってしまうと、女性はついていられないのです。

特色ある項目

森本 一番面白いと思ったのが「経験」のところ。あれはつまり、神学の特定問題の一つではなくて、神学の営み全体に関わる問題ですから、フェミニスト神学の貢献が大きいところなんです。

それから岡野先生の書かれた「世界宗教

と女性」、それから「全体性」、非常に良いですね。フェミニスト神学の真骨頂です。

奥田 男性神学にはなかった項目ですね。フェミニスト神学者の中の女性という意味で、女性フェミニスト神学者という言葉が出てきますから、男性フェミニスト神学者もあるということですね。

森本 ただし、この神学の大きな主張では、いくら僕がフェミニストだと主張しても、「あなたは男性のものと考え方に捉われてしまっている」と言われることになり、意味のある主張だとは思いますが。

奥田 それまでは人間は中立的な存在だと言いながらも、その人間は男だったんですよ。

森本 そういう批判は良いのですが、逆に今度は男性排除になると……。

岡野 男性は当事者ではあり得ないという発想は、この事典からはもう抜けています。男性も女性も入っているということ为前提としています。

奥田 今の日本では、フェミニスト神学という言葉を知らない人もいますし、知っている日本語がないと聞いたことがあります。

新しい訳語

奥田 「父権制」という言葉が多く出てきますが、日本では「家長制」のほうが一般的ではありませんか。

岡野 これにはただし書きがついていたと思います。「父権制」には、ヨーロッパ的な「男性中心主義」が背中あわせにあるからです。

森本 「父権制」と「男性中心主義」を項目としても分けるところはやはりドイツ的です。ね。だいたいそれは一緒にしますよ、普通は。

奥田 日本ではこういうふうに分けてもよくわかりませんね。

岡野 日本では分けられないんですよ。こういうふうに分けたという西洋的な発想が、いかに異質のものであるかということを知るために良いと思いました。

森本 期待が大きいかから不満なんですけど、「レズビアン存在」。あまりにも簡単でした

でも反発する人も多いと思います。聖書のなかの都合のいいところだけピックアップして解釈しているという感じで反発する人もいるでしょう。やはりこの本は論議を呼ぶと思います。日本の場合、フェミニズムの視点がキリスト教界になかなか入っていないわけですね。フェミニスト神学そのものをばつと受け止められる人がすごく少ない。

森本 先生の教会はどうですか。フェミニズムのお話をされているのですか。

森本 話します。この問題は女性だけの問題ではなくて、同時に男性の問題でもあるということを理解してもらえようかな形です。

奥田 男性を敵に回しているようなフェミニズムはだめなんですね。

森本 説得力のあるフェミニズムでやらないうとだめでしょね。聖書解釈についてもその場でわかるような説教をすれば、なるほどということになりますから。

奥田 具体的な実例をきちんと出すことによって、フェミニスト神学をわかっていっね。

奥田 あちこちに引用してあるからさぞかしたくさん書いてあると思つたら。あまり革新的なことは書いていませんでした。ね。ゲイに対する視点をとりいれてもよかったです。

問い直される神学

森本 確かにキリスト教は女性を抑圧してきたのですけれど、同時に聖書を本当に読み直せば、女性を解放する力になり得るんだということが、少しでも見えていない限り、キリスト教神学をフェミニズムでやる意味がなくなってしまうと思います。フェミニスト神学をやるという意味は、ここにあると思います。

奥田 今までの日本のフェミニスト神学というのは、聖書解釈が中心だったでしょう。現実の問題に神学的にどう取り組むか、それがこれから日本のフェミニスト神学の目指す方向ではないかと思えます。本書でも強調されているように、フェミニスト神学の基本姿勢は、女性の経験を基礎にする

でもらうという方法は良いと思います。この事典にはそのような具体例がたくさん書かれています。

森本 伝統的な概念、「十字架」、「象徴」、「三位一体」をフェミニスト的に解釈していく、これはこの神学事典の強みですね。

岡野 新しさです。「聖霊」も、男性的な要素ではなく、ルーアツハという女性的な要素が背景にあったということから始まります。

さきほど「全体性」がたいへん面白いとおっしゃったでしょう。「全体性」を大事にするという背景には、結局、男性の神学者が中世を通じて神学を構築する際に、いわゆる二元論を作ってきた、しかも上下関係の二元論を作ってしまったけれども、本来は楕円形、二つの定点が均衡を持ち、相互性を持って、大きな全体を描くという発想は、この事典の目玉にしているのではないかと思うんです。

奥田 「全体性」は英語ではホルネスですが、モルトマン・ヴェンデルの著書の翻訳をされた大島おかりさんから、ぴったり

いうことですから。

岡野 いわゆる伝統的な神学の中で当り前に使われてきた概念を、今度はフェミニストの視点から捉え直すという部分は、すばらしいものが多いと思います。

女性が現在力を得ているのは、私たちの背後に先輩の女性神学者、古代の哲学者も含めて、殉教者や中世のいわゆる神秘家と言われている女性たち、それは内容的には立派な神学者ですが、それらの女性たちの思想という伝統資源のお陰なのです。いわゆる二元論で男と女を分けるのではなくて、男性の伝統と女性の伝統とを見直すことによって、神学がより豊かになるであろうという提案は、すばらしいと思います。

(おくだ・あきこ 恵泉女学園大学講師)

(もりもと・あんり 国際基督教大学準教授)

(おかの・はるこ 実践女子大学教授)

(B5・二七八頁・本体一三五〇〇円 [税別] 日本基督教団出版局)